

公 開 講 演 会 要 旨

大官大寺について 大官大寺の伽藍配置については、従来、塔と金堂を東西に対置する形式をとるという見解が有力であったが、発掘の結果金堂推定地には建物を造営した形跡がなく、造営年代の問題をも含めて従来の想定を再検討する必要に迫られた。そこで、『扶桑略記』に示す大官大寺焼亡の時点（和銅四年）では中門・回廊が未完成であった事実や、出土遺物の年代観などから「大官大寺」の造営年代を全体として文武朝まで下げ、これまで講堂と見做されていた遺構を『大安寺伽藍縁起』にみられる文武朝造営の金堂に比定した。そして、この文武朝大官大寺は高市大寺とは別に、条坊制に則った「新益京」の官寺として新たに造営されたものと推論した。高市大寺の究明は今後の課題である。

（甲斐忠彦）

近年の民家調査 民家調査は近年各地で行われ、県単位の調査報告書も多数刊行されるにいたって、全国的な視野のもとにこれを総合する段階にきている。それには民家形式の地方性を一度消去して全国共通の指標を設定することも一つの方法で、民家の発展を規模の拡大の面ととらえ、そのパターンを分棟、桁行拡大、梁行拡大の3種にわけ、各パターンと地域との関係を概観した。

（吉田 靖）

平城宮朝堂の諸問題 平城宮跡の大極殿・朝堂の比定地区として、宮中央の朱雀門中軸線上の中央区とその東の中壬生門中軸線上の東区が考えられているが、この二地区をめぐって、最近の発掘成果と文献史料から大極殿・朝堂の変遷を考えた。和銅創建時の大極殿・朝堂は中央区に造られた。これは、唐の宮殿建築の影響下に造られた特異な構造のものである。養老8年から天平初年まで藤原武智麻呂によって宮内改作が行なわれ（家伝下）、東区に大極殿・朝堂が整備される。これは、藤原不比等・元明太上天皇の死を契機として、聖武天皇の即位をめざして造られたものである。東区へ大極殿・朝堂が遷った後、中央区は中宮・朝堂となる。中宮・朝堂は国家的な饗宴の場としての性格をもち、平安宮豊楽院の先駆となる。

（今泉隆雄）

古代国庁の構造について 国府は律令国家の地方行政府として設置された。この国府の中核をなす国庁はいかなる構造をもち、また律令体制の動向といかにかわりあっていったかを明らかにするため、多賀城内城（陸奥国庁）・城輪柵内郭（出羽国庁）・三大寺遺跡（近江国庁）・伯耆国庁の殿舎配置形態とその変遷を検討した。国庁殿舎配置の基本的なパターンは中央正面に正殿をおき、前面広場をはさんで左右に脇殿を配置し、これを扉でとりかこんでいるが、この中でも正殿の両脇に長大な脇殿を配置している例と正殿の前方に小規模な脇殿を配置している例がある。この国庁の殿舎は平安時代初頭を前後する時期に、改作、増築され、またより整備された。一方では新たに国庁が建立された。律令体制が動揺・崩壊はじめる時期に郡衙の衰退とは逆に、国庁の殿舎が整備されたことは国庁を中心としたより実質的な政治が行なわれたことのあらわれであると推定した。

（菅原正明）